

## チェルヌィシエフスキーの歴史哲学(Ⅲc)

武井勇四郎

チェルヌィシエフスキーは、価値の分配様式を「勤労者の理論」の中核に据えて、「生産者=所有者=受益者」が組合的同胞体における人間のあるべき姿とみていた。前述した通り、「生産者=所有者=受益者」のカテゴリーは、スミスとベンサムの両原理の、価値分配における理論的帰結であるが、価値の生産あるいは生産様式にとっても内的に調和しているのであろうか。別言すれば、このカテゴリーは、チェルヌィシエフスキーの一貫した人間学的視点からみて、価値の生産にも理論的に整合しているのか。この問題の分析から始めて、このカテゴリーがまた彼の交換過程の消滅の論点と有機的につながっている点を指摘しよう。

チェルヌィシエフスキーによれば、ロシアの農業生産は家父長制的な粗笨な生産用具による耕作から、イギリスに見られるような近代的な機械導入による大規模生産への転換期にさしかかっており、行く行くは、ロシアも農業機械の導入、化学肥料施肥等による大規模農業生産に至ることは必定である。農業もその特殊性があれ、工業の如き様相をとることも疑いの余地がない。だが、ロシアは資本主義的農業経営、つまり、資本と労働の分裂による生産様式に進路をとるべきではない。さればとて、農奴の土地緊縛（農奴法）、粗雑な農地利用（割替え制度）、粗笨な農具（鋤鎌）等による、いわゆる家父長制的農業が、生産停滞の主要な悪因である以上、これを存続させるわけにはいかない。小規模耕作 *petite culture* だからとて、必ずしも家父長制的性格を伴う必然性はない、他方、大規模耕作 *grande culture* は、必ずしも資本主義的経営を伴うものでない。ロシアの小規模経営にも、イギリスの大規模経営にもそれぞれ

れそれなりの利点があるはずである。チュルヌィシェフスキーはこの点をこう述べる、——小規模農業経営のあらゆる優越性は一点に尽きる、つまり、労働がその成果に直接利害関係をもっている人によって遂行されるということである。……大規模経営のもつあらゆる優越性もまた一点に尽きる、つまり、大規模経営は運営をうまくするための非常によい手段をもち、よりすぐれた用具をもち、土地の経済的配置をもつということである、と。彼によれば、この生産様式を異にするそれぞれの利点は、現行の、ロシアとイギリスのいずれの生産様式にあっても両立不能の関係にあり、一方が立てば、他方は不可能なのである。別言すれば、両者の利点はアンチノミー的矛盾に陥っている。前者の利点が、労働主体の利害・欲求に、生産意欲に直接かかわり、後者の利点が、労働主体外の労働手段や資本にかかわるものであることは、明白である。チュルヌィシェフスキーの表現で言えば、前者の利点は「労働の質」にかかわり、後者の利点は「生産過程の質」にかかわっているのである。この用語の詳説はしばらくおくとして、彼はこのアンチノミーが解決可能な矛盾と見ているのである、つまり、次のように解いたのである、——すぐれた経営のためには大規模な農地が必要である。すぐれた経営のためには、労働者が雇傭者でなく主人でなければならない。これらの条件が経営のうちに共に存在しないと経営は成功裡に運ばない、と。つまり先きの「生産者 = 所有者 = 受益者」のカテゴリーがこのアンチノミーの唯一の解であるというわけである。もっと具体的に言えば、「生産者 = 所有者 = 受益者」なるものが保証されていれば、大規模生産にあっても、小規模生産にみられる利点が生き、不両立どころか共に合して相乗作用となるというわけである。

チュルヌィシェフスキーは、このアンチノミーの弁証法的解法とも言える普遍的定式を呈示した。——生産の成功は二つの要因の積にある。それらの要因の一つは生産操作の改善の程度、もう一つは労働の質、同じことだがそれを操作する労働者の質、自明のことだが、一つの要因がきわめて大きいなら、別の要因が小さくとも、それらの積はかなり大きい。しかし、積において最も有利

な大きな数になるのは、二つの要因がたがいに釣合った大きさの時である、と。端的に言うなら、同程度の「労働の質(качество труда, характер труда, качество работника)」と「生産過程の質(характер производительных процессов, качество производительных процессов)」との積が、最大値を成し、それが生産量(力)の指標となる。チェルヌィシエフスキー得意の「仮定的方法」で具体的に述べれば、今、生産過程の質をA, 労働の質をB, 生産物量をC, 生産に当てられる力の一定量を20単位とすると、

$$\begin{array}{r} 1 A \times 19 B = 19 C \cdots \cdots \text{〔I〕} \\ \vdots \\ 19 A \times 1 B = 19 C \cdots \cdots \text{〔II〕} \\ \vdots \\ 10 A \times 10 B = 100 C \cdots \cdots \text{〔III〕} \end{array}$$

勿論,〔I〕は小規模生産のロシアの場合であり,〔II〕は大規模生産のイギリスの場合であり,〔III〕が相乗積が最大値となる理想の場合である,無論のこと〔III〕は,両極をなす〔I〕と〔II〕のアンチノミーの解である。さらに重要なことは,この定式に加えて,「労働の質」の変化は,「生産過程の質」の変化によっても惹き起され,また逆であり,よってこの二つの要因の大小が,ある時代の「経済組織の方式 способы экономического устройства」を決定するものである,という経済社会史観を呈示した。例えば,奴隷制社会にあっては,A,Bが共に小さい,ロシアの農奴制社会は〔I〕に近く,イギリスの資本主義社会は〔II〕に近いというわけである。しかし,いずれも最適な「経済組織の方式」に基づく経済社会ではない。〔III〕の社会は,チェルヌィシエフスキーが希求してやまなかつた組合的同胞体であることはいうまでもない,つまり,ロシアの農村共同体は土地の共同体的所有である以上,労働者が労働の成果に直結しているので,「労働の質」の一要素である生産意欲を保証している,しかも機械導入,化学肥料施肥等による農業の大規模経営の導入にたいして何らの障害ともならない。何故ならば,「勤労者の理論」が示しているように,共同体構成員すべてが主人である以上,労働と資本の分裂はなく,よって搾取関係がないので,機械,資本はすべて搾取手段ではなくて,むしろ共同体

の物質的福祉そのものとなるからである。「生産者 = 所有者 = 受益者」の категорияは、ただ単に価値の分配から帰結するだけでなく、また価値の生産からも帰結するものであることがわかる。

「労働の質」という概念は、単に生産意欲というだけにとどめられない広汎な概念であり、既に指摘しておいたように、彼の言う「道德資本」と等価的である。チェルヌィシェフスキーの考えでは、農奴法下のロシアの「労働の質」は、決して西欧をしのいでいるわけではない、だから「労働の質」の改善が、むしろ物質的資本の投下によって促進されなければならない。彼はこの点でこう述べる、——あらゆる生産におけるすべての改良の一般的な経済的性格とは、どのようなものか。生産は、労働の質、すなわち勤労者の質の改善によっても、あるいは生産用具の改善によっても、改良され得る。（素材の改善はその生産における改善、したがって勤労者または生産用具の改善の結果である。）より熟練した勤労者を養成するためには、その養成のための資本投下が必要である。勤労者に、仕事へのより大きな熱意を植えつけるためには、これまた勤労者の生活改善のための資本支出が必要である。……生産の改良はすべて、固定資本の増加にほかならない、と。「労働の質」の改善には、知識の発達、勤労精神、節儉、遵法精神、慎重さ、分別力等々を高めること、延いてはそれらを停滞せしめている農奴法とアジア的専制を撤廃すること、よって一口で言えば啓蒙と同時に革命が要請されるが、しかし、彼は単にロシア的な「労働の質」を批判したにとどまらずに、利潤、地代、労働賃金という生産三要素説に基づく「経済組織の方式」、つまり西欧先進国の経済組織内における「労働の質」のあり方を分析するにまで至っている。ミルは生産三要素説を暗黙の前提において、生産過程、生産技術の改善と労働者の知能、細心、節儉、実直の向上というものが、農作物の逡減の法則に対抗し得る要因であると述べ、利潤、地代、労働賃金三者の拮抗関係ないしは勢力関係について分析のメスを揮わなかった。この点ではチェルヌィシェフスキーは根本的徹底的批判主義者であった。ロシアのラジカリストはミルの『経済学原理』の分配論の結論にたいして

こう論評を加えた、——〔生産物の〕三要素分割は、〔勤労者の〕経済理論の要求にマッチしないように思われる。この理論は、労働の成功は労働の質、つまり労働者の質に依存する、と語る。この理論は、良き質は何よりもまず人間の福祉に左右されるということを公理と見做している。したがって、労働の成功は労働者の福祉に依存している。三要素分割にあっては、労働賃金は満足すべきものであり得ない、労働者は良好ではあり得ない。利潤は、この分割にあって、出来る限りわずかの生産物量を労働者に残そうとやっきになる。〔しかし、この勤労者の〕理論は、利潤というものは活動と節儉への刺激に役立てられるべきであると、語る。……三要素分割にあっては、人間を怠惰と浪費に追いこむ不節制は徐々に瀾漫する。この理論は産業的進歩にたちはだかる障害物を除去することを配慮する。地代を労働賃金と利潤から切り離す制度は、地代の中に進歩に敵対する力をつくる。これらの特性は生産物三要素分割の本質自体にある。この三要素分割は、その偶然的な属性によってではなく、その本質そのものからして〔勤労者の〕経済理論の要求にマッチしない。学問や人間的福祉の諸条件に矛盾するものは、原理の維持と相俟って変化するような細目細事の中ではなく、むしろ分配の三要素体系の原理そのものの中に横たわっているのである、と。では、何故、生産要因としての資本、土地、労働から、利潤、地代、労働賃金という分配三分割が正当化される「経済組織の方式」に、劣悪な「労働の質」あるいは「労働の質」の劣悪化の原因・傾向があるのか。チェルヌィシェフスキーは、それを利潤、地代、労働賃金三者の力関係そのものの中に求めている。利潤と労働賃金両者の関係の考察では、彼は利潤は労働の価値(労働の賃金)を差引いた剰余生産物であるというリカードの見地を引き継ぎ、利潤の大きさと労働賃金の大きさは反比例関係にあり、しかも利潤が幾何級数的に伸びる傾向を有するに反し、労働賃金は労働者のぎりぎりの生活費に押し下げられると断じた。しかもその上、この現象は人口の増減に無関係とし、人口の増加が労働賃金の必然的低下を招くというマルサスとミルの見地を根拠薄弱であると断じた。地代についてはどうか。チェルヌィシェフスキー

の考えでは、利潤よりももっと<sup>たち</sup>性の悪い保守的の代物である、というのはリカードによれば土地は富を産みだすのでないのに、地代は、そのくせ利潤と労働賃金両者共に併呑しようとする志向をもつからである。地代は歴史上常に進歩の敵で、保守的階級の特権であった。地代を占取する階級に対しては、中産階級と平民勤労者は常に同盟して来たことを歴史は語っているとして、彼はこう書いている、——地代の利益は、利潤と労働賃金の両者の利益と対立する。地代を占取する階級に抗して、中産階級と平民は常に同盟者であった。利潤の利益は労働賃金の利益に対立する。資本家階層と労働者階層が、地代を占取する階級に抗して団結してそれにたいして支配をからとるやたちまち、一国の歴史は、その主たる内容からみて、中産階層と人民階層との戦闘の形をとるのである。この最適の例が、1830年代からのフランスの歴史である、と。チェルヌィシェフスキーは、こと地代論に関しては、『経済学及び課税の原理』の著者の見地に倣って、地代の幾何級数的伸びを「仮定的方法」でもって説いている。リカードによれば、社会の発達に伴う人口の増加につれて、豊穡度の異なるA、B、C級の土地のうち、B級の耕作に進めば地代はAに生じ、C級の耕作に進めばBにも生じ、Aの地代は更に騰貴してB地代とに差が生じる。チェルヌィシェフスキーはこれを受けて、「仮定的方法」を適用する、今、一社会があつて年間40俵の小麦で生活し、それに要する年間労働日を1,000とした場合、次表のようになる。

土地豊穡度	1俵当り労働日	小麦俵数	生産労働日
A 級 地	15	20	300
B 級 地	30	10	300
C 級 地	40	10	400
総 計		40	1,000

さて、地代が強要された場合、リカードの理屈からしてA級地の地代は $40 - 15 = 25$ 、 $25 \times 20 = 500$ 、同様に、B級地の地代は $40 - 30 = 10$ 、 $10 \times 10 = 100$ とな

土 地 豊 穡 度	1 俵 当 り 労 働 日	小 麦 俵 数	生 産 労 働 日	地 代	総 労 働 日
A 級 地	15	20	300	500	800
B 級 地	30	10	300	100	400
C 級 地	40	10	400	—	400
総 計		40	1,000	600	1,600

る。今、仮に、この社会が小麦の外に他の欲求を満足させるために800労働日が当てられるとすれば、総労働日は1,800となるが、 $1,800 - 1,600 = 200$ で、事実上、200労働日しか当てられない。つまり地代として600労働日が取りあげられているからである。800労働日を十全に満足させるとすれば、勿論、地代分だけ余計に働くことになるし、総労働日1,800を固定させるなら、他の欲求を切りつめるか、それとも小麦俵数を減らすか、それとも両者を共に行うことになる。小麦俵数や他の欲求を減らさないうで、C級地よりも更に劣る土地を耕作して行けば、C地にも地代が生じ、A、Bの地代は更に騰貴するという結果を招くことになる。この点をチェルヌィシェフスキーは次のように要約している、——地代は、利潤が労働賃金にたいして演じたと同じような役割を演ずるのである。地代は総生産物が伸びるよりも、もっと急速に増進する。しかし、地代はわずかの量から出発する故、生産物の増加分の初期では、まだ地代の伸びはすべてのものを併呑しない。つまり、利潤と労働賃金に残される部分のパーセントの内容が減るだけである。しかし、この部分の絶対量が、尚、伸びている。つぎに生産物の増加分のすべてが地代によって呑みこまれてしまうほど、さらに地代は大きくなる。地代が、以前の利潤、労働賃金に残されていた生産物部分から益々多くのものを掌中にするので、増加分のすべてが不足し、故に、この部分の絶対量も益々減少する、と。このように、地代は理屈の上では幾何級数的増加の一途をたどるはずであるが、実際にはそうになっていない。それを喰い止めているのは、チェルヌィシェフスキーの考えでは、二つの要因が作用しているからである、一つは生産物の三要素分割と全く関係のない力、「文

明の進歩の力」が社会の不平等を減ずるように作用しているからであり、他は地代の増大の極限そのものの中に負の力が働き出すからである、こうである、——三要素分割において地代を抑制しているもう一つの力は、地代が増大せんとする極限そのものの中にある。つまり、地代は利潤と労働賃金の併呑に向う、即ち、生産物の三要素分割の打倒に向う、これよりももっと不満足な制度の形式に取って替る方向に向う。企業家も労働者もその中では自立性を失って、土地所有者の附属物、彼の所有の部分になる如き形式に取って替る方向に向う。三要素分割における地代は奴隷制の再興に向う、ちょうど、利潤もそれに向うように。しかし、この体系においては、利潤は労働者の資本家への従属を意味するが、地代は労働者、資本家を共に土地所有者に従属させる。自明のことだが、この反動的傾向は、生産における成功の減少として現われる。即ち、三要素分割においては、地代は労働賃金と利潤に残される生産物の分前の減少に向うだけでなく、総生産物そのものの減少に向う。即ち人口の減少に向う。人口が減少すれば、勿論、以前の劣等地の耕作の必要はなくなる、よってこのことから地代は自分の墓穴を掘るわけである。総生産物を減少させる地代のこの傾向は、勿論、それを増大せんとする進歩の力と闘うことになる。そして、新時代においては、進歩の力は、既に、不断の優勢を占めるほどまでに大きくなっている。そして地代の働きは、新しい歴史においては、生産物を減少させるのではなく、むしろその増大を減少せしめているにすぎない、と。

チェルヌィシュフスキーは地代にたいして並々ならぬ関心を示した、否、示さざるを得なかった。何故ならば、「上からの改革」を推進し、それを吹聴している改革=自由主義経済学者は、専ら、1861年の農奴解放を「土地なしの解放」による西欧的な自由雇傭関係の創出として喧伝していたからである。端的に言えば、チェルヌィシュフスキーが手きびしく批判している三要素体系そのものの創出、西欧先進国の生産様式の追従であったからである。よって彼は生産三要素体系の内的矛盾を、利潤、地代、労働賃金三者の勢力関係の中に剔抉し曝露することであり、そのことにより、ロシアの目前に迫っている農奴解放

の自由主義的路線の性格を露呈せしめることであった。「利潤と地代そのものが生産物の三要素的分割を破壊しようとしている、つまり、地代は利潤と労働賃金を併呑しようとすることによって、利潤は労働賃金を吸収しようとすることによって、そしてこのことを通じて、利潤と地代が首尾よくうまく行けば行くほど、その制度を放擲してしまうのだ。われわれは地代を得る階層の勝利に続いて、あるいは利潤を得る階層の勝利に続いて、その都度、その階層を放擲してしまう変革が、不可避免的に続かなければならないことを、歴史の中に見ている」と彼が言う時、地代の余地のない、利潤すらも、さらに労働賃金という名称すら消滅する組合的同胞体の創出のための革命を、農奴解放に対峙せしめていた。

再び、「労働の質」に立戻るなら、「労働の質」の真の改善は、ただ単に教育や啓蒙に尽きるものではなく、経済的にも勤労者の独立が保証されるような「経済組織の方式」にも大きくかかっているということがわかる。人格だけを解放し、自由雇傭で資本に緊縛する「自由な雇傭者」ではなく、「生産者=所有者=受益者」の創出が、言葉を換えれば、組合的同胞体の人間——資本や地代に支配された利己<sup>エゴ</sup>を追求する利己人間でなく、自らの利益の追求が共同体の福祉の追求ともなる全的人間——の創出が、「労働の質」「労働者の質」の窮極の改善である、という概念をチュルヌィシエフスキーは編み出した。そして「労働の質」にたいする彼の考えの中にも、啓蒙と同時に革命が不可避であるという思想が読みとれるのである。歴史の進歩は啓蒙か、歴史の進歩は階級闘争(革命)か、両者間にいかなる関係があるかについてのチュルヌィシエフスキーの見地は統論に譲ることにして、『ミル「経済学原理」露訳とその評言』の中で尚残る大きな問題は交換である。これにたいする彼の見解を仔細に考察してみよう。

組合的同胞体の基礎理論である「勤労者の理論」からすれば、彼が描いていた社会では交換過程の消滅は当然予想されるであろう。事実、彼は交換過程は

あらずもがなの過程と考えているのである。資本主義経済においては、生産物が商品の形態をとる以上交換価値は最重要な概念となることは指摘するまでもない、よってチェルヌィシェフスキーの交換価値や交換過程にたいする人間学的批判は、それだけ資本主義そのものへの痛烈な批判の形をとらざるを得ない。その批判が人間学的性格をもつとはいえ、交換価値の反人間的性格、人間＝商品の非人間的性格にたいする彼の洞察は瞠目すべきものをもっている。

「資本家の理論」がよって立つ経済の中で人間性に悖る最大の現象は何か。チェルヌィシェフスキーによれば、それは交換過程において、ある生産物が他の生産物と交換価値を通して交換されることではなく、労働が商品と、別言すれば、労働者が、否、人間が商品と、否、物と交換されることにある。つまり、資本主義的経済社会関係が、交換を媒介として、労働（労働力ではない）を「自由なる契約」の法の下で売買すること、同じことだが掛替えのない生身の人間有機体オルガニスムを商品という物に貶しめることである。労働活動の主体が人間である以上、労働を商品として賃金と引替えに売することは、人間を商品として売ることと同値であるとして彼は次のように言う、——労働を商品とすべきか、それが交換価値をもつべきかという点に根本的な問題がある。商品とは何か、私的所有になる人間の生産物であるか、それとも自然的対象である。前者の場合でも後者の場合でも人間から離れて存在する何かの物である。そして労働とは何か、同様に人間から離れて存在するものであるか、否、それは断じて人間から離れては存在し得ない人間的存在の一部以外の何ものでもない。手にはめられる手袋は販売される、しかし、人間の手は販売されない。本は売られるが、作家の頭は市場に出ない。すなわち、作家が金のために人に命じられた通りに書くことを余儀なくされるなら、彼の頭が売られたという風に、われわれは誤った表現をするのである。しかし、この作家が自分の頭を売ったという風には言わずに、彼は自分を売ったという風に語られる方がまともである。同様に人間の手も売られる、つまり、ブラジルのポルトガル人は、ネグロを買うが、特にこのネグロの手のみを買う。こうして人間の頭と手は現に販売される

が、ただ人間そのものと一緒にそれらが売買される以外ではあり得ない。労働も同じことである。労働の売買は人間の売買以外ではあり得ない。もし労働が商品なら、これは人間自身が商品であるという仮定以外にはありようがない、と (傍点——引用者)。見られるように、人間有機体の四肢がバラバラでは機能しないように、労働活動は全有機体的活動であるから、その活動は四肢のそれとしてバラバラに機能していない。したがって労働の売買は人間そのものの売買と等値である、よって、彼によれば、奴隷制下の奴隷の売買と近代社会における労働の売買は質的に区別されるものでなく、永久的所有か、一時的的所有か、主人の物理的強制力によるか、法的力によるかの量的区別にすぎないのである。奴隷の売買も、「労働」の売買も、名称こそ違え、人間そのものの売買の何のもでもないのである。強制と権力か、自由契約という法的衣裳かは、形式の違いにすぎない。無論、このチェルヌィシェフスキーの見地には人間有機体の尊厳に比重が置かれ、歴史的な文脈の軽視が目立つが、決して当時のロシアの状態からすれば、批判力の乏しいものではない。彼によれば、労働というものは、愛、理知、良心、感情、誠実、神経の感受性と同様に、人間有機体全体の機能であって物体のもつ作用とは異次元なのである、したがって物としての商品の如きものに還元ないしは算入不可能な人間的事象なのである。彼は言う、——労働を交換価値に帰することは、労働を人間にとって無関係な諸対象と比較することを意味する。例えば、小麦1チェトヴェルチを12時間労働の5労働日と評定しよう。これは人間労働の60時間を、われわれが小麦1チェトヴェルチと同等にしたことを意味する。これらの概念の間に、等号を立てるのが役立つかは読者が判断されたい。労働は人間有機体の活動であって、その活動は、同じ有機体の活動以外のものと共通分母に入りえない活動である。……ある人にとっては罪を犯す性向が健康を配慮するよりも強く、他の人にとってはこれら二つの力が均衡していて、今一人の人にとっては健康の配慮が罪を犯す性向より強い、といったことはよく言われる。しかし、このような表現は正しい。ここでは概念や現象の同一の領域の対象が比較されている。同様に、人間

のその他のすべての性向や傾向、行動、動機をそれら自体の間で比較できる。しかし、1 kgと1 kmとを、あるいは音と光とをわれわれは比較できない。……同様に、労働生産物同士の間では比較はできるが、しかし、生産物と労働とを比較することは決してできない。これは通約不能な対象である。労働が一生産物に転化するものとしても、ピアノの音を、この音を出す木や鉄と比較すべきではないように、生産物と労働を相互に比較すべきではない。勿論、労働が増せばそれだけ生産物も増す、勿論、労働が減ればそれだけ生産物も減る。……ある対象がある他の対象に転化し、ある現象がある他の現象に転化することは少なくない。しかし、あるものが他のものから発生しているにも拘らず、両者が全く別の種類のものであれば、両者は決して比較できない、と。

チェルヌィシェフスキーは、労働が対象化されて生産物の形をとることを否定しない、したがって生産物同士がある基準——彼にあっては労働の量——によって交換され得ることを認める、だがしかし、人間や人間労働が物や商品の形をとって他の商品と交換されることを断じて容認しないのである。周知の如く、資本主義の経済は人間を人格としてでなく物として扱うことは、マルクスの説くところである。ロシアのチェルヌィシェフスキーも資本主義の交換過程にあっては、労働者が物として見られるという人間の物象化現象を美事に洞察している。しかし、この洞察は非常に直観的である。マルクスが対象化論から始めて、価値、交換価値、商品、資本等々へと説き進め、人間の物象化を資本主義経済全体の中で開示したのに引換え、チェルヌィシェフスキーはブルジョワ経済の交換過程に現象している人間の物象化の直観的把握から、いきなり、人間の商品化、労働の商品化の元兇である交換過程そのものの消滅を強く要請するのである。したがってチェルヌィシェフスキーにマルクスが『資本論』で展開した如き価値の詳細な論理的展開を求めることは土台無理である。それは彼が価値概念を人間学的な欲求概念にじかに引きつけてしまうからである。よって彼の価値論上のいくつかの概念は曖昧さを免がれ難い。用語も厳密性を欠いている。

チェルヌィシェフスキーの考える交換価値 *меновая ценность* とは、ミルの言う「商業的価値及び価格」に近く、転売という性格を強くもち、時の事情、偶然と慣習、競争によって左右され、需要と供給によって変動する価値である。貨幣で表示されている場合価格である。これに対して「事柄の不変の本性」によって規定されていて、偶然や競争によって増減しない価値を、彼は内在的価値 *внутренняя ценность* と名付けている。この内在的価値とは一体何か。普通、使用価値とは、そのものがある欲望を満し、あるいはある目的に役立つような効用をもつことを指している、あるいは、ある物が使用された時、ある欲求を充足させるような、その物がもっている質ともいえよう。チェルヌィシェフスキーはこの使用価値というカテゴリーを用いていない。ミルが『経済学原理』で援用している『経済学の論理学』の著者ド・クウィンズィは内在的価値（内在的効用）という用語を用いているので、おそらくチェルヌィシェフスキーはこの用語を借用していると見られる。当のド・クウィンズィはこれを使用価値と同義に用いている。次のチェルヌィシェフスキーの一節は、彼の「内在的価値」を解く鍵である、——われわれが認めたように、全く異種なるものの対象はたがいに比較し得ない。ではどういう風にしてラシャとパン、薪と絵は、交換価値の<sup>ノルマ</sup>一基準にもたらされるのか。それらの価値の比が、直接間接、生産価格 *стоимость производства* を通して需要と供給の均衡によって与えられる。さて需要とは一体何か、そして供給とは一体何か。需要とはこれ即ち対象を獲得せんとする人間的衝動 *побуждение* の一定のエネルギーであり、供給とはこれ即ち対象を生産せんとする人間的衝動の一定のエネルギーである。こうしてすべてのものは一つの共通の分母に、——人間的欲求のエネルギーに還元される。ここにわれわれはすべての経済的有益計算の根本基準を見出した、それは人間的欲求、性向、要求に存する。この分析に応じて、需要と供給の均衡は、対象を生産せんとする欲求力が対象を使用せんとする欲求力に通約されるという事実以上でも以下でもないことを意味している。人間の生産物にたいする要求やそれへの性向が強くなればなるほど、それだけ強く人間はその生産

に向う。これだけで全部だ、と。この一節の言明には「生産者 = 所有者 = 受益者」の категорияが前提として置かれている。彼は需要供給の法則を常に高く評価していたが、市場価格の決定として評価したのではなく、彼のいわゆる「経済的有益の計算」に資するものとしてである。これはそのもの自体の真の価値を測定する計算であるが、「事柄の不変の本性」としての内在的価値は、つまりこの計算にかかるものであるはずである。よって内在的価値なるものは、人間の欲求、その充足によって測定されるものである。別の表現を用いるなら、彼のいう「有益」という人間的自然に普遍的に存在する性質そのものによって測定されるものである。彼が需要と供給の市場法則を換骨奪胎して人間の欲求の、有益の一般法則に仕立てた所以がここにある。彼によればブルジョワ社会の交換価値は内在的価値に合致しない変則的な性格をもっているので、もし労働が交換価値によって売られるなら、人間が市場価格という「事柄の不変な本性」によってでない偶然的な事情によって、物として売られるということの意味している。それに反して組合的同胞体ならこうなるのである、——交換価値は内在的価値に一致し、需要、供給、生産価値の概念は、経済活動の基本的要素に、つまり人間の欲求にじかに求められることによって、最も精密な性格を獲得する。供給はここにあっては生産諸力の量によって規定される、需要の規模は生産物にたいする生産者の必要性の強度によって規定される。生産の価値は労働の量によって直接に規定される。需要と供給の均衡は、生産諸力が様々な企業にどういう割合で配分されれば、人間の欲求がもっともうまく充足されるかの有益計算を通じて得られる、と。既に詳述したように、彼のいう「経済的有益の計算」は人間の欲求の充足を最大限に調和をもって理性的に算出する計算法である。内在的価値はこの計算にかかるが、競争や偶然や利己のみの利益を考える転売のための交換価値は、この計算にはかからないのである。「生産者 = 所有者 = 受益者」の categoriaに基づく共同体的社会にあっては交換価値は消滅し内在的価値に還元されるとして彼は次のように述べる、——生産物の交換価値は度外視される、生産物は直接人間の欲求の下に入る。諸欲求の満足

にとつての生産物の有効さのみが考察される、つまりその内在的価値が考察される。生産物による交換価値の獲得は偶然的な、例外的な事柄と見られるようになる。何故ならば大量の生産物は売買や交換に付されず、直接、生産者の欲求に奉仕するからである。仮に生産物の一部分が他の生産者の生産物との交換に入るにせよ、交換価値と内在的価値とは区別されない。つまり内在的価値は決して増大も減少もせず直接に交換価値に転ずる。交換を経ずして生産と消費との直接的関係を前提し、勤労者の手に労働賃金と利潤との結合を前提し、消費者と生産者との同一を前提し、雇傭労働制度を否定しているこの見地は、自然の事柄である、と。見られるように、商品、交換価値を分析して資本主義社会の全貌を把握したマルクスとは違って、チェルヌィシェフスキーは、ブルジョワ経済の交換価値の不合理、非人間性の曝露から、合理的な、人間本性に依拠した内在的価値へのその還元を通して、交換過程の消滅した同胞体的生産・消費の社会像を提示したのである。よってまた貨幣や流通過程の彼の分析も乏しいものとなる。

交換過程の媒介手段たる貨幣は、彼によれば、「普遍的な購買力」の代理者であるが、その特徴は生産物と比べて永久性と交換容易性にある。しかし、この特徴の故に金・銀の貨幣は一個人に富の集中を容易ならしめ、不平等の原因をつくる、とりも直さず、富者の貧者にたいする支配権を強め、「貨幣はすべてを支配する」社会をつくる。しかし、彼は貨幣それ自体がこのような現象を生み出すのではなく、生産と消費の間に交換をおくような「経済生活の様式」にこそその根本原因があると見た。よって彼は生産者が同時に直接の消費者であれば問題は解決済みであると速断したのである。この辺を彼はこう述べている、——生産者自身が自分の生産物の主要な量を消費し、人間自身の労働の生産物が、各人によって消費される生産物の主要な量を成すようになり、生産されたすべての生産量のほんのわずかの部分しか交換されなくなるようになる時、——一言で言えば〈各人が何よりもまず自分で且つ自分自身のために働け〉という経済理論の原理が、十分秩序正しく遂行されるような生活様式が発生した

時、その時、経済生活における貨幣の重要性も減少するとわれわれは想定する、と。労働賃金は、彼にあっては、労働が生産物（商品）として、あるいは同じことだが、人間が商品として売買される際の、交換価値としての貨幣である。貨幣形態をとった労働賃金は、三要素体系にあっては地代と利潤によって最低限におしとどめられる宿命を担っている、何故なら地代は利潤と労働賃金を併呑しようとし、利潤は利潤で、労働賃金を呑みつくそうとするからである。これに反し、利潤、地代、労働賃金の三者が一体となる組合的同胞体にあつては、「労働賃金 рабочая плата」というブルジョワの概念は、死語となり、「報酬 вознаграждение——воз+награда ある行為にたいする褒賞の意——」なる無階級の概念に取って替る。この後者の概念には、いまだ働きに応じて、能力に応じてという意味が含まれていることに注意しなければならない。チュルヌィシェフスキーは「必要に応じて」生産物を取得し消費する社会は、すぐれて発達した段階の社会と見ていた。この意味では、交換価値は内在的価値に還元されるけれど、生産物の生産価値（価格）は労働の量 количество труда によって測定されるという見地は、依然として残るのである。共同体的消費の前段階に、労働量による報酬が考えられていたと思われる。

彼は確かにブルジョワ的な交換過程を否定したが、組合的同胞体内の交換を全面否定したのであろうか。ここにあっては先述した如く、高度の分業による大規模生産、同一人の幾種類かの仕事の従事、共同体的協業が説かれているが、交換はどうか。彼は共同体内の交換は主要な経済現象ではなく、副次的で、生産者間の仲介にすぎぬものとしてとどまるとして、次のように述べる、——生産者は彼の商品〔品物〕が消費者にどれだけ必要であるかを知らなければならない、消費者は消費者で商品〔品物〕が生産者にいくらかかっているのかを知らなければならない。共に相手に通じていなくては、経済生活に何らの確実な堅固なものはない。生産は非常にぐらつく、消費は無分別な乱費（この場合、商品〔品物〕は過剰にだぶつき、その価格は安くなる）と供給の不足との間で動揺する。それに反して、消費者のことが生産者に、生産者の事柄が消費者に

双方共に通じている場合、商品〔品物〕の販路は確実である、そして、生産者は、生産者と消費者との間にいる仲買人 посредник を、消費者と生産者を支配する独自の地位を取らせしめない。事業を他人の手に引渡そうとする気のない処には、危機はない。(仮え仲買人が残る必要があるとしても) 仲買人は、仲介者 комиссионер, 委託人 поверенные 以上のものとはならない、と。生産者と消費者の間に商人をおくこと、同じことだが、生産と消費の間に交換をさし挟むことは、彼によれば、経済を「錯綜とした、厄介な、危機的な」状態に、見通すことが出来ない不透明な性格に、相互に認知不可能な状態にするのである、よって彼は生産者自身が消費者であるような理想的な場合においては、生産の性格と生産量が、直接に消費者の諸欲求に正確に対応すると主張する。ここからして、チェルヌィシェフスキーの組合的同胞体の構成規模は、フーリエのファランステールの規模となる必然性が出てくるのである。生産規模は小作的なものでなく機械を導入した大規模生産でなければならないとしながらも、2,000名以上を超える同胞体は無理なのである、何故なら共同体構成員相互の認知が不透明となり、生産量は欲求(需要)と不照応を来たすからである。必需品生産と非必需品生産の合理的比率、それらへの労働諸力の配分、最大多数の最大幸福(福祉)を考慮した生産物の配分、勤労者の諸欲求に合致した生産量の決定等々を算出する<経済的有益の計算>は、共同体構成員間の相互認知が可能な範囲内での計算であるという性格をもつ。チェルヌィシェフスキーは、<経済的有益の計算>は、自由放任の原理、自由競争の打算よりも、それらが消滅しても尚残る万有引力の如き普遍的な法則であると見做しているが、小単位の経済現象に通じるもので、ロシア社会全体の如き一国単位のそれに通じない性格をもっている。つまり、交換過程が幅をきかし独自の運動体となる如き経済現象には通じないのである、何故ならば、交換過程が複雑になればなるほど、経済現象は不透明となって見通しのきく有益な計算が出来ないからである。現に、彼は、何百何千もの組合的同胞体を想定し、それら同士の交換も必要によってはあり得るとしているのである。また、町や農村との交換もあり、

ある国の他の国との交換もあるとしているが、ここでの関係は、非常にわずかしか述べられていないので、各々の組合的同胞体と一国との関係等は、非常に曖昧でわかりにくい。『資本と労働』の結論部分から見て、つまり組合的同胞体の、フーリエのファランステールの類似性からみて、またフーリエの農業本位的性格からみて、チェルヌィシエフスキーの考想は、フーリエ思想に範をとっていたことにはほぼ間違いない、またそう言っても大過とはなるまい。筆者はチェルヌィシエフスキーの考想が、どれだけフーリエに近似ないしは酷似していたかという点には、あまり意義を認めない。一般に未来社会の図式や絵図を精密に描けば描くほど、益々空想的、幻想的性格を強くすることである。むしろ重要なことは、ブルジョワ経済学や経済現象の批判が、来たる農奴解放の批判へのベクトルを成すかである。もしこの視点を抜くなら、チェルヌィシエフスキーの農民空想社会主義は、文字通り、「空想性」のみにとどまろう。

既述した如く、チェルヌィシエフスキーにとって、交換過程の最大の不合理は、労働が商品として売買されることであるが、交換過程はまた独自の活動として「競争の原理」と商業活動を産み出したというのがまた彼の見地である。

*laissez faire, laissez passer* や「競争の原理」の思想にたいする彼の批判については統論に譲るとして商業についての彼の見地に若干触れておこう。商業は、彼によれば、直接に交換過程に結びついていて、決して生産活動ではない、貿易もそうである。元来、地代、利潤、労働賃金三者が一体となっている経済生活にあっては、交換の役割が減少している以上、商業活動は仲介 *комиссионерство* に還元さるべき性格のもので、無くてもよい活動である。ところがブルジョワ経済においては常に投機と結びついていて経済の混乱、破産を惹き起す張本人なのである。過剰の取引、投機的購買、買占め、信用の破綻、詐取等々はすべて商業的投機がもたらす副産物である。したがってこれらの副産物の否定は必然的に投機の抑制につらなるが、交換過程の役割を減ずる方向で解決するのではなければ解決にならないとして、次のように彼は論及している、——投機は益々無謀にまでひきこまれている。そして投機は今日の商業の魂で

ある。今日の秩序の下で投機に反対し、それを抑制しようとするのは実りない強制手段への、言葉の無駄使いであり、無駄な遊び事である。科学は要求する、周知の制度の不可避的な結果に子供っぽい闘いを挑む代りに、われわれがこのような結果を産み出している制度そのものの取りこわしと修正にたずさわることだ。今日の商業は、購買力が生産力から切り離され、利潤が労働賃金から切り離され、労働が商品の性格をもち、生産物を所有するのが主人としての労働者自身ではなくて、労働者を雇っている人間であるような社会での、交換によって取られる純然たる形式である。しかし、労働が商品であり、労働者が生産物の主人でないような時、社会における交換の役割は、経済理論の諸原理によって許容される限界を、はるかに超えて拡大の一途をたどるのである、と。

以上の、交換過程の消滅に基づくチェルヌィシェフスキーの組合的同胞体の考想は、何よりもまず、ロシアの残存せる土地の共同体の所有を基盤としたオプシチナによって規定されているが、更にこれは1848年の社会主義者の思想によっても規定されていることも無視しがたい。彼が露訳したJ. S. ミルの『経済学原理』が1848年刊であり、しかもミル自身が第2篇分配、第1章「所有について」と第4篇生産および分配に及ぼす社会の進歩の影響、第7章「労働諸階級の将来」の中で、社会主義的な立場にかなりの同調を示していたということも考慮に入れなければならない。無論、チェルヌィシェフスキーはミルを随所で色々の面から批判しているが、彼が縷説している共同組織、協同組合の原理には大きく影響を受けていることは一分の疑いもない。また、フーリエのファランジュの構想もさることながら、1848年の立役者、ルイ＝ブランとブルードンの活動や思想にも大きく左右されていることを見逃がすわけにはいかないのである。 =つづく=

### 使用テキスト

Н. Г. Чернышевский : Полное собрание сочинений, в пятнадцати томах, Дополнительный том, 1939-1953.  
Государственное издательство художественной литературы, Москва.